

随筆

各地の水辺を訪ねる－10

古峯園

亀田 泰武*

1. はじめに

栃木県鹿沼市の山奥といえるようなところにある神社の庭園である。その存在を知ったのは造園関係の専門誌で、どうもきれいな写真の撮れる庭園のようだというので、5月下旬の晴れた日に出かけた。栃木県には写真の撮れる水辺がいくつかあり、ときどき行っているが、朝に晴れを確認して出発すると現地に着く頃に曇りがちになることが多い。京都市の北の方もそうで、運のせいかもしれないが山が迫っているせいであろうか。この日も昼過ぎから雲が多くなり日差しを待つことが多かった。

漢字の峯は通常、部首の山が遍となる峰が多いが、ここでは冠になっている。読み方は古峯神社はふるみね、古峯庭園はこほうと同じ漢字で違う。また地名は国土地理院の地図では古峰原（こぶがはら）となっている。地理院地図では神社も庭園も峰の字が使われている。神社のHPでは古峯ヶ原の一方、鹿沼市のHPでは峰が多い。漢字表記はともかく、同じ漢字の読み方が3通りに使い分けられているのが面白い。探してみると峯の字を使う固有名詞はけっこう多い。

ここにいくのは大変である。鹿沼市の西の端、標高が約700m程の高地で、道はないが山の向こうは日光市で銅山のあった足尾となる。東武線の新鹿沼駅かJRの鹿沼駅でリーバスという定期運行バスに乗り、終点の古峯神社まで約1時間。バスは1時間に1本程度で、インターネットに時刻表が載っているのでバスの時間を見ながら計画するのがいい。

新鹿沼駅からバスに乗ったが乗客は殆どいなくて途中から一人になって心細かった。しかし終点の古峯神社に到着すると神社の門前に休み所が2～3軒もあ

た。最初に神社にお参りしたが広い建物で、人が沢山働いていて、多人数の会食の準備をしたりしていたし、お守りなどの売店もあった。

その後古峯園に入ってそのすばらしさに驚いた。日本庭園としては関東一といえるほど、景観が良く、京都の名庭なみに管理も行き届いている。東京の数ある名庭がこのように丁寧の手入れされていたらいいのであるが。

これほどの庭園があまり知られていないのは不思議である。5月のお出かけ日和なのに、平日ではあったが庭園内は数人のお客しかいなかった。

2. 古峯神社

神社は約500ヘクタールにおよぶ広大なものである。これほどの山奥に立派な神社が運営されていて、多くの人が神社の仕事に従事しているのが驚きであった。

神社のウェブによると御祭神は日本武尊（ヤマトタケルノミコト）で、1300余年の昔、隼人という人が京都からこの地に移り、日本武尊の威徳を慕い、京都よ



古峯神社境内

* KAMEDA Yasutake, (NPO) 21世紀水倶楽部理事長
URL <http://www.mizumirai.net/sitema/>

りこの古峯ヶ原に遷座したのが始まりとされている。

その後、日光を開かれた勝道上人が古峯ヶ原の深山巴の宿において3ヶ年の修行の後、天応2年（西暦782年）日光の男体山に初めて登頂し大日光開山をなされた。

この縁起にもとづき、日光全山26院80坊の僧坊達は、勝道上人の修行にあやかっ、年々古峯神社を起点に古峯ヶ原に登山、深山巴の宿で祈願を込め修行する慣わしとなり、その修行は明治維新に至るまで、千余年続いた。明治になって神仏分離が行なわれ、仏具一切が取り除かれ、純然たる古峯神社となり、現在にいたっている。

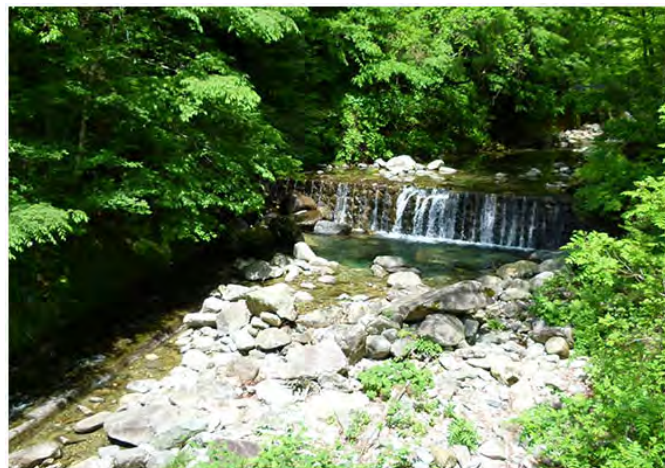
神社の運営が安定的に行われている基盤として、講組織があるとされる。講とは神社を崇敬する人の集まりで、講元や世話人が中心となり、毎年交替で参拝し、神社参拝に関する費用や運営を行うもの。古峯神社では講の数が約二万もあり、構成員は二百万人を越し、春秋には、こうした参拝者が全国より集まってくるとのこと。古峯神社は、数多くの付属の講をもつ神社として、全国でも稀にみる社の一つとされている。

参拝者が多く来訪するため、宿泊施設も大きい。大広間（288帖）最大収容数 150名、中広間（110帖）最大収容数 50名、食堂 平成の間（216帖）など広いもので、参拝目的以外に、林間学校や合宿などの宿泊や各団体の研修会などが出来るようになっている。門前の茶屋的な休み所があるのも理解できる。煮しめたこんにゃくがおいしかった。

一方、霊地として、火伏信仰、天狗信仰などの信仰も集めてきた。古峯神社は「天狗の社」とも呼ばれ、神社内参籠室や廊下には崇敬者から心願成就の暁に奉納された天狗の面、或いは、扁額、火ばし、下駄、わらじ、天狗人形などが所せましと掲げられている。天狗は、崇敬者に災難が起こった時、直ちに飛翔して災難を取り除いてくれるとして広く根深い民間信仰がある。

3. 庭園の由来

古峯園は古峯神社の神苑として昭和53年（1978年）に生まれた割に新しい庭園である。古峯神社の石原敬士宮司が周辺環境の悪化などにより日本庭園の静けさや趣が失われていくことを憂い、豊かな自然と雄大な山を背景にした庭園を作り、一般に開放しようと考えたのがはじまりで、昭和を代表する造園家の岩城亘太郎（いわき せんたろう）が作庭を行った。岩城亘太郎は造園業の植治7代目の小川治兵衛の甥にあたる。



大芦川
古峯園に渡る橋から

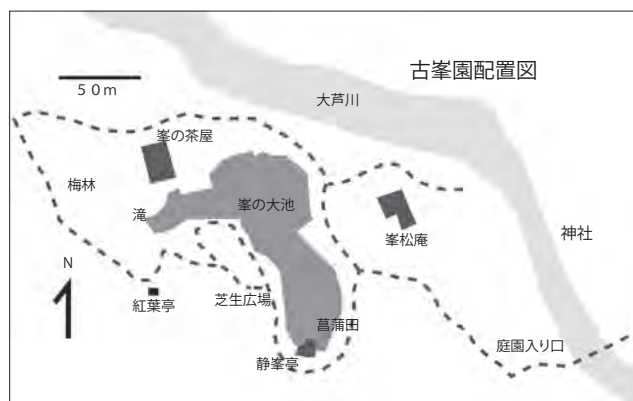
植治は江戸時代宝暦年間からはじまり、現在株植治になっている。

代々の当主が小川治兵衛の名前を受け継ぎ、特に有名なのが7代目で、無鄰菴、碧雲荘など京都東山の庭園群を手がけた。これらについては「琵琶湖疏水の水辺」工業用水No.602 2010-9で紹介している。岩城亘太郎は植治の下で修行後、戦後京都から東京に移り、岩城造園を立ち上げ、以来名庭を生み出してきた。代表作はホテル大倉やニューオータニの庭園など多数ある。

4. 古峯園の遊覧

庭園は神社から大芦川の谷川を挟んだ対岸にあり、橋を渡ったところが入り口で受付がある。

そこから林に覆われた園路を150m上っていくと、視界が開け峯の大池があらわれる。池の向こうの景観は植え込み、芝生、庭木、森と続き、その上に山が入り、雄大な風景を作り出している。池の端は広い道になっていて池の反対側には大きな杉の木立に囲まれた茶室の峯松庵がある。峯松庵は土堀に囲まれ、明るい



古峯園配置図



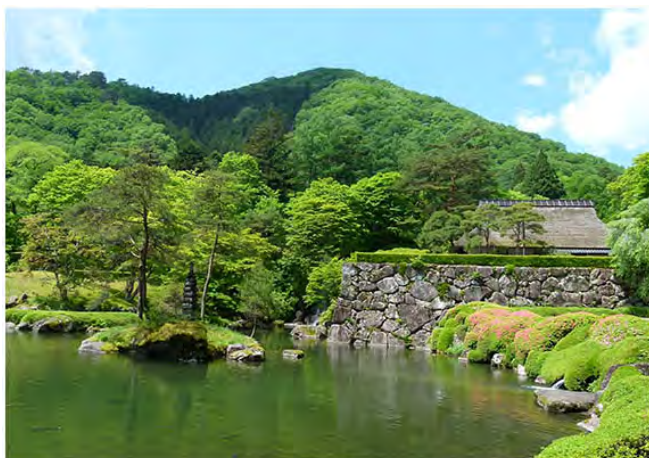
古峯園入り口の門



池に出たところから南方向

池まわりと対照的な雰囲気醸し出している。

大池に沿って右に進む。右が木立、池側はツツジの刈り込みが続く。池に石垣がせり出していてその上に峯の茶屋のかやぶき屋根和風建築がある。池山回遊式庭園の池に城のような石垣が面しているのは珍しい。石垣の上の少し高いところからの視点で庭を楽しむこ



峯の茶屋の石垣

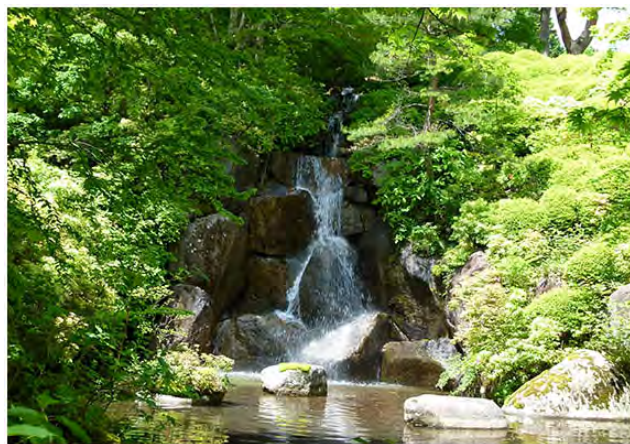
石垣の左奥に滝。手前にも小さな水の流れ出し

とができる。

ここでは茶菓のサービスがあるが取材した日はお休みであった。石垣の横は池が引き込んでいて、奥に小さく滝が見える。石垣の前には小島があり、小さな石塔が立っている。茶屋付近は上り坂で、茶屋を過ぎると梅林がある。

園路は林の中を大回りしてしばらく行くと四阿の紅葉亭に至る。山道の途中で池を見下ろしながら一休みできるようになっている。

紅葉亭を過ぎて曲がりくねった園路を行くと再び峯の大池に出る。大池沿いの道を左に峰の茶屋の方に行くと滝を身近に見えるところに行き着く。滝は大芦川から流れを引き込んだもので、大きくないが自然らしさが出ている。池の水源はこの滝の他、池の北に小さな水の噴き出し口がある。



滝

大池沿いの道を静峯亭の方に歩いて行くと出っ張りのところの石組みに小さい灯籠が置かれていて、園路の山側は明るい芝生の原となっている。日差しの注ぐ、芝生の広がり、足立美術館庭園に見られるように日本庭園の新しい景観を示している。

明るい池沿いの園路を歩いて行くと池南端の広い四



池と灯籠

阿の静峯亭にいたる。建物が池に突きだしていて、池越しに庭園を鑑賞できる。細長い形の池の端にあるので視界もちょうどいい広さとなる。よく手入れされた明るい池付近の向こうに針葉樹の森、その奥に山と雄大な構図が広がる。



静峯亭からの眺め



池からの流れ

静峯亭の近くに池の水の流れ出し口がある。水量が多く、池の管理がいいのか、流れはきれいであった。豊富な固有水源を持つことは日本庭園の池では重要なことで、東京の数ある名園が、固有水源がなくなって淀んで見えるのは残念なことである。

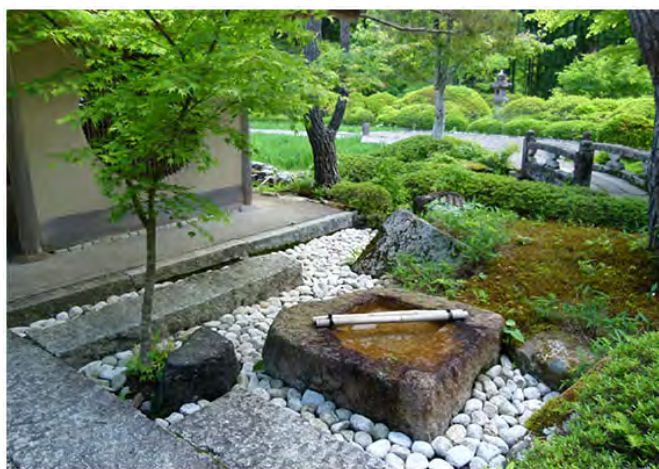
静峯亭から東北方向池沿いは菖蒲園になっている。池の水面と菖蒲園との高さの差がないため堰堤が目立たない。大きな池のある庭園では農業用水池と兼用となっているため水位変動がある場合が多いが、ここでは日本庭園だけの目的になっているので水位がほぼ一定に保たれて良好な景観を生み出している。

菖蒲園を過ぎて、池のまわりを大回りしたことになる。

庭園は細かいところまで入念に作られている。例えば静峯亭の園路からの入り口には枯山水がある。茶室



静峯亭と菖蒲園



静峯亭入り口付近

の峯松庵はまわりの杉の大木林を残してその中につくられた。和風の屏に囲まれ落ち着いた雰囲気形成されている。

5. 終わりに

古峯園は四季を通じて楽しめる。春の梅から始まり桜・藤・山吹・つつじ・しゃくなげ・さつき、夏の花菖蒲・あじさい、秋の萩、かえでなどの紅葉まで。雪景色もいいと思うが山間の地形なので足もとがどうだろうか。これほどの日本庭園があるのをずっと知らなかったのは不思議である。公園の専門家に聞いてみたがやはり知らなかった。

管理も非常に丁寧で、相当の人手がかかっているようである。

各地の名所でもけっこう交通不便なところが多いのに、公共輸送機関で訪問できるのもありがたい。

参考

古峯園－日本の庭巡礼－ 庭NIWA No.216 2014年秋号